

愛の寵氷 薔薇の刻印

R18



小説 カルビ
絵 ねり者



氷の寵愛
薔薇の刻印



もくじ

0	ルベル・ローズの告白……………	6
1	隷属の薔薇……………	8
2	情婦の日々……………	23
3	地下室にて仕置き……………	61
4	絶望に手折られる……………	81
5	禁忌婚……………	122
6	エレウス・ローズの記憶……………	135
7	エピローグ……………	139

登場人物

ルベル・ローズ

勇者の末裔の貴族。魔王退治を任せられた。父親を畏敬している。

エレウス・ローズ

ルベルの父親。魔王と戦い戦死したと言われている。

ニーグム

魔王。エレウスに倒されたと思っていたが、生きていた。

0 ルベル・ローズの告白

父親がいた。いつも大勢の人に囲まれて人徳を持っていた、素晴らしい白騎士エレウス・ローズ——代々続く、勇者の末裔ローズ家の中で歴代最強の騎士と謳われている。

実際父は、魔王ニーグムと相打ちになりながらも世界を救った偉大な人である。

だけど、俺は父親がどうしても怖かった。父は一切感情が顔にでない人で、何を考えているのか幼い俺にはわからずただただ怖かった。加えて魔力の影響で氷のような、ゾツとするほど青い目をしていた。あの冷たさを帯びた目で見られることが苦手な仕方なかった。それでも誰からも好かれていたのは、実際恐ろしいのは外見だけで、優しい人だと誰もが言っている。父を美しいという人もいた。でも幼い俺にとって父とは、恐ろしく畏怖すべき存在だった。

父親も息子のそんな態度を分かっていたらしく、あまり深く関わろうとせず、父子の記憶などあまりない、せいぜい片手で数えられるほど頭を撫でられたか、俺が馬鹿をやらかして仕置きをされたか。

勘違いされては困るが、俺は父親を怖いと思うが敬愛もしている。

いや、それ以上のモノを抱いている。

美しい父を遠目から、特に屋敷の薔薇園を歩く父様をこっそり眺めるのは甘美な時間だった。手入れされた薔薇園を歩く父様は、まるで楽園を管理する美しくも冷酷な天使のようで、氷の目は、薔薇を慈しむ時だけは心なしか柔らかな光を帯びていた。

こっそりと屋敷の死角から覗いていた俺は、興奮と衝動に駆られて——いや、この先は思い出すまい。

1 隷属の薔薇

両手に枷を嵌められた状態で、勇者ルベルは魔王ニーグムに捕らえられていた。

兜で顔を隠している魔王だが、目元だけは僅かに隙間があつた。その隙間越しの冷たい青い目が、今は亡き父を思い出して身震いしてしまふ。ルベルにとって父親とは、同じ勇者として誇りでもあり畏怖するような存在だつた。そんな少年の心情など知るわけもなく、魔王の冷たい手がルベルの臀部を撫でた。

「んっ」

不浄の場所を触られ、思わず変な声が出てしまふ。

（魔王は何をするつもりなんだ……）

父親であり白騎士エレウスが命の引き換えに倒したはずの魔王ニーグム。それが突如現れ国を混乱に陥れた。エレウスの子であり騎士名門ローズ家のルベルは、国王の命により魔王討伐を仰せつかったが、結果は惨敗。挙句、魔王城の地下牢に囚われてしまつている。



(拷問だろうか……俺に耐えきれられるだろうか……)

ニーグムの指に小さな魔法陣が展開し、そのまま排泄孔へと魔法陣を押し付けた。

「ぎゃっ!!!」

何万もの針で刺されたような痛みが走り、宙ぶらりんの体が跳ねた。ジャラジャラと天井から伸びる鎖が音をだす。

(尻になにをした……うん、熱い、ムズムズする……)

尻穴を中心に熱いような痛いような不思議な感覚があった。思わず股を摺り寄せ、尻穴をキュウキュウと絞めつけてしまう。

「気になるか」

ニーグムは嗤いながら魔法で作られた鏡で、ルベルの体に何が起きたか見させた。

「な……」

尻皺を中心に真っ赤な薔薇の刺青が施されていた。息を吸うと尻皺は、窄まり蓄のよう赤色が膨らみ、吐くと、窄みが微かに広がり赤色が花卉を咲かせるよう綻んだ。

「余専用の奴隷印は気に入ってくれたかな。お前の一族は確か薔薇の紋章だったかな」

「っっ!」

敗北した勇者以外に、ローズ一族そのものを侮辱する行為。勇者は齒噛みしながら鎖をきつく握った。しかし魔王の人差し指で軽く、紋をなぞられると陸に上がった魚の如く腰が跳ね、噛んだ唇から甘い声を上げた。

「はあああ！ あ、あああん」

（ただ尻をなぞられただけでこんな……！）
指の腹で刺青薔薇をなぞられるだけで、体の奥底からむず痒く微弱な快感が込み上げてくる。

「この薔薇は淫呪だ、呪いによってお前はこれから尻穴で女のようによがり狂う余の情婦になるのだ」

「だ、誰がそんなのに！」

怒りが湧き上がり、射殺さんばかりに魔王を見上げるが指で薔薇に触れられるだけで怒りは霧散し、気持ちよさがこみ上げてくる。

「あつ、ふ、ふう、う、うう」

「堪らぬだろう、ククッお前の花芯も興奮しているぞ」

薔薇の紋を丁寧一枚一枚なぞられながら、肛門皺を解されていく。皺がほぐされ緩く

なっていく度に両手の鎖が煩く鳴り、足がバタつく。

「敵に勝られる気分はどうだ、お前の父親も……エレウスもさぞや悔しかろう」

「やめろ！ 父さんのことは、言うっひゃあああ！」

目をつぶり、現実から逃げようとするが臀部を鷲掴みされた甘い衝撃に目を開けてしまった。兜越しの魔王の青い目が父親の目と重なり、勇者の心にヒビがはいる。

(う、ああ父さま……)

父は、剣技にも魔法にも優れた人だった。いつも沢山の人に囲まれ、求められていた。

歴代ローズ家の家長の中で、最も素晴らしい人だと誰もが褒めたたえていた、自分とは真逆の人。

「そう言えば、アヤツは氷魔法が得意だったせいかな体温が低く目も碧かったな」

「だ、だからなんだ……」

「言い回しも私と似ていたな、声も氷のように冷たく低かった」

「何が、言いたい」

「どうだ、余を父と思って抱かれてみては？」

「巫山戯るな……！」

ルベルの視界が真っ赤になり、魔王の兜へ噛みつこうとした。しかし鎖に縛られている体では上手くいかない。

「おお、怖い」

ケラケラとわざわざらしい笑い声での嘲笑をしながら、不浄の穴へ指挿入。

ズブズブ、ズヂュ。

「——っおお!？」

魔王の指は、人間の何倍も体温が低く野太い。まるでアヌスを氷柱で貫かれている衝撃だ。出口とは真逆の違和感と慣れないせいで余計に感じる圧迫感も加わり、ルベルは体中から脂汗を流す。

「っ、冷たい、うう」

(あ、あああ、冷たくて、こ、この歪みは剣ダコ……硬い、冷たい……!　ち、違う、皆さんの指とは違う!　似ていない!　絶対違う!)

冷たく剣を使い込んだ硬い手を、父親の手だと錯覚してしまう。ぬぷぬぷと指が抜き差しされながら魔王が冷たい舌で耳を舐めてくる。

「体液が出てきたな、感じ始めたかもの好きめ」

低い声帯が記憶の中の父の声と被る。

「いけない子だ」

「~~~~ッ!~!~!」

叱る時に父がよく使う言葉が、同じイントネーションで耳に入ってきた。一瞬魔王の顔が父親の顔になり、背徳感を覚えてしまう。

(違う、違う! これは魔王の、魔王のおお?!?)

必死に言い聞かせ無心になろうとしたが股間に直接甘い衝撃が走った。

「なるほど、ココがいいのか」

「んひいい!! や、やめ、いいっ、やめろ、そこ、触るなあ!」

コリコリと硬い感触を味わうたびに、花芯へ血が押し寄せる。

何度も何度も冷たい指が押しってくる。ルベルは嫌悪と混乱で涙を溢しながら、大袈裟なぐらい腰が震え、足が突っ張りそうなほど伸び上がり、陰茎に電撃を食らったような愉税に苛まれた。

「どれ、ここにも奴隷らしく証を刻んでやろうか」

「ひっ、やめろ! やめろおおおおお!~!~! ンひひひひひひひひひひ!~!~!」

魔王が人差し指に魔法を展開させ、内側から再び針に刺され痛みが沸き上がる。内側から焼け溶けてしまいそうなほどの熱さが肛門を中心に膨れ上がる。

「あ、ああああっ！！！」

腸壁、前立腺のあたりに薔薇の模様が描かれた。途端に肛門内部に甘い衝動が巻き起り、ニーグムの指を絞めつけてしまう。

「さて、これで下準備は終わった」

「ひっ」

魔王が着込んだ鎧の一部を脱いでいく。

異形の身であり魔物の王に相応しい生殖器。

亀頭の先端から竿の上へ半分まで肉棒が捻れており、竿の下半分は小さなペニスだと思っほどの疣が生えそっており疣自身もピクピクと小刻みに振動していた。

「やだ、やだああああっ、つく、んっ……」

薔薇の紋ごと亀頭で肛門口を捏ねられると、ありえないほどの快感が走った。自分の陰茎を握られ扱いた時と似たものを尻から感じてしまう。

(そ、そんな)

取り返しのつかない体にされてしまったと改めて思い知らされてしまう。

「いい声で鳴け」

「や、やあ——！」

ズブ、ズヂュウ……。

ゆっくりとペニスが入り込んでいく。ヌチャヌチャ音を立てながら大した痛みもなく、初めてとは思えないほど簡単に魔王の異形巨根が勇者の尻壺全てに入りきった。

「まさか最初から根元まで咥えてしまうとは思わなんだ。クク、お前は情婦として才能があるのやもな」

「そ、しょんにゃ才能、い、いらぬ……」

一切の痛みがなく、むしろ快感を覚えている自分にルベルは寒気を感じる。このまま魔王に嬲られ続ければ自分は一体どうなるのか底の見えない恐怖が襲う。

「キスは……今はやめておくか。怒鳴られたら叶わん」

（魔王は、何を言って……？）

魔王ニーグムの言葉は、しかしすぐさま吹き飛ばす。

「動くぞ」

「あ、や、まっ！」

ヌヂュ……ツブツヂュン！ ……ッン、パンパン！ パンパン！ パンパンッ！！！！

ゆっくりと数回抽送を繰り返して、挿入がスムーズにできると癡猛なピストン運動が始まった。頭に桃色の霞がかかり、足の指が快感で反り返る。二、三回目のピストンで勇者の尻壺は大量の潤滑油を分泌させ、魔王の牡槍を愛液でたっぷりコーティングさせた。

「やあ、こ、こんら、お、おかひっ、お、お尻、お尻で……うそ、うそっひゃあ、ふああ！」

ルベルの頬が薔薇色に染め上がり、菊皺からは本人の意思を無視して何度も直腸愛液が噴水してしまう。

「お、おお、んっふ、ふううっうう！」

(あづいい、尻がドロドロして……！)

体温が低い体と正反対に魔王の肉棒はマグマを凝縮したような熱さだ。

肉棒が自ら回転しながら肉を捻らす勢いできたかと思うと、小さなペニス余すとこなく、腸壁の皺肉を引っ搔いていく。肥大化した前線腺が小さな肉棒に直腸越しに何度も擦られて、血管が切れるのではないかと思うほどパンパンに陰茎が膨れ上がる。

(らめ、きもちい……きもちいよお……！)

「んん、お、おおう！ ほおお……♡」

人知を超えた性技に呆気なくルベルの快樂数値はキャパオーバを起こし、受け止めきれなくなっていく。

ズヌグチュ……ヌヂュ。肉棒と蜜壺をもつと密着させようとニーグムの腰に足を絡ませ、控えめにだが、ルベル自ら腰を振りだした。天井から垂れる手枷を握りながら、魔王のピストンに合わせて腰を押しては、引いていく。

「……っはあ！ おおっ……♡ つくほおお♡」

（お尻い、イボイボペニスと擦れるのがあ……♡）

薔薇を刻まれた尻皺を、痒が引つ掻きながら出ていったかと思えば、内側へ巻きこむようズブズブと埋まっていく。途方もない快樂がルベルを襲い、思考は与えられる気持ち良さだけを享受しようと躍起に墮落していった。

「はあ、おおっ、くっほおおい！」

ヌヂュ、グヂュ！ ブヂュ！ ヌヂュ！

勇者は凌辱されているのも忘れて、涎を垂れ流しながらもつとつと、腰振りを激しくさせていく始末。

「あ♥ つあああ！ あ、いい、いいい！」

「おお、なんとも浅ましく淫らな姿だ」

そんな状態を兜越しの魔眼に射抜かれた。表情はわからないが、氷そのものが侮蔑と嘲笑を語っているようで勇者のわずかばかりの理性が悲鳴を上げた。熱くなる体と反対に心に冷水をぶっかけられた気がする。

「——あ、あ、あああ……」

(この目、この目はあ)

自分が何かいけないことをして、父が怒ったり呆れたりした時の瞳であった。あの目に見下ろされながら怒られるのが、幼少時は酷く怖く父親が死んだいまでもトラウマとなつて焼き付いていた。

「どうした、盛った猿のように腰を動かしていたのをいきなりとめて。お前は魔王ニーグムの情婦だ、余を満足させるのがお前の義務だ、動け！」

ズチュウツ、グチュ、ジュツヌグポオオオ！

「あひい、んはあああああ！ あちゆい、おかひ、おかひくなりゆうううう♥」

人外男根に腸壺をグチャグチャにされ、理性はあつと言う間に脳内の片隅に消えてしま

う。寒気の代わりに背筋に熱い震えがゾクゾクと駆け上がった。

パンパンッ！　パンパン！　パンパンッ！

魔王の逞しい肉槍がトロトロの蜜壺を掻き混ぜながら、力強く肉壁を突いてくる。巨根同様に人間よりも大きな陰囊が、挿入と同時に臀部を叩いてくる。

「くっひ♥　ひっ、んっひい♥　あっひいひいひい、いく、いく、いっくうううううううう！！！」

「勇者よ、存外呆気なかったな」

「んひいひい！　らっつてえ、らっつてえええ、おち×ぼがごりゅごりゅすりゅからあああ！！！」

冷たい声になじられプライドがキリキリ痛むが、甘える仕草でニーグムの首に鎖に繋がれた手を回す。理性も父親への負い目も、この快樂の前にはどうでもいい思えるほど些細なものに思えてしまう。

「やはりお前は勇者などより、情婦がお似合いだ」

嘲る魔王のペニスがどんどん熱と質を増していく。

「淫乱な尻壺のお陰で余も限界が来たようだッ！」

魔王ニーグムの射精は下半身が爆発するような衝撃だった。腸肉を突き破るのではない

熱烈な兜へのキスをしながら、ルベルの意識は白濁に飲み込まれていった。

•••••

魔王の腕のなかには、拘束から解放された勇者ルベルがいた。尻穴から白濁液を溢しながら、時折肌を紅潮させ艶めかしく体を跳ねていた。

「……嫌い」

魔王ニーグムの目の色が変化する。それでもそれは酷くわかりにくい。青色を知り尽くした者ではないとわからないだろう。

「お前些か器量が狭いぞ、それでよく人格者だと大勢を騙せたものだな」
なにやら呟く魔王。しかし牢屋には気絶したルベルと魔王しかない。

2 情婦の日々

勇者としての素質はなかったが、愛玩として愛いでられる素質はあったらしいな」

「ふ、ふうっ、ふうううっ！」

魔王城のエントランスホール。

ニーグムが眺める先、石で造られた台座の上で縛られているルベル。頭を擦りつけ、手足を猫のよう丸めた状態で尻を掲げている。薔薇の刻印をつけられたアナルから本物の薔薇が花束のよう咲き乱れていた。

「余はただのオブジェとして設置したが、薔薇を活けられ花瓶にされるとはな」

「くう……ふうう……う、ううんッ！」

薔薇一本の茎は細いが、肛門を五センチも拡張する量を詰めこまれている。ルベルの排泄孔と直腸にかなりの圧迫感があった。なにより往來の激しい廊下で生きた花瓶にされるのは、酷く恥かしい。顔を埋めて目を強く瞑って、行き来する魔物の視線を感じないようにしても、ねっとりといやらしい視線を薔薇の刺青が敏感に察して、甘い羞恥で直腸と蕩かせるのだ。

「もっと、淫らにしてやろう」

ニーグムが活けられた薔薇たちへ魔力を注ぎ込む。禍々しい魔力を吸った花同士が、グネグネと動き出し絡み合い一つの生き物のよう癒着し大きくなっていく。

「や、な、なに、なにっがあ、ああっ！ つおほおおお！」

ルベルの声が裏返り、尻が大きく前後へ動いた。

ただの植物だった花たちが、小さな樹木のような触手へ生まれ変わり意思を持って動き出したのだ。緑色の触手に、鑢のような細かな疣がびっしり生えており、妖花へ変化した薔薇たちが甘ったるい蜜を、少年の肌へポトポト溢していく。

「ひっ、ああっ、あひっ、や、やめ、ろおおっ♡」

ズブ、ズヂユ、ズッブヂユウウ。

細かくびっしりと生えた疣が肉壁を擦れると痛悦が炸裂した。痛さと快感が交互に繰り返され、感覚がごちゃ混ぜに溶けあっていく。

ぶちゅ、ぶっび、ぶっぢゅっ！

「くっひい、へえ、あっひいひい！」

直腸愛液と妖花の蜜が触手に絡まり、尻壺のなかで掻き混ぜられる。触手がズルズルと

ヒリ出てくると吸収しきれない混合液が腹に溜まったガスと一緒にヒリでて下品な音を奏でてしまう。

「臭いが甘い屁だな」

「う、うるっひゃんひいひいひい♥」

ズル、ズリユル！　ぶぢゅうぬぢゅううう！　ズリユルリュウ！

長大な触手が刻印を掠めながらでてくる感覚は大便をヒリ出すのに似ており、原始的な快楽が尻穴から無限につづいた。途切れない便を排泄している気がした次には、一気に異物が腹に詰め込まれる圧迫感と真逆の感覚に白目を剥いた。圧迫感に慣れだした瞬間には疑似排便快楽に心身が掻き乱される。

触手が野太い幹から極細の蔓を作り出した。蔓は、尻皺を伸ばし淫紋を擦りつづけた。

「っああ♥　あひ、ひいひい、しょこ、しょこはらめええ♥」

肛門皺を伸ばされただけで緩い電流が肢体を駆け巡るのに、尻の薔薇を直接触れられると快感で頭が真っ白になってしまう。

「薔薇と戯れる勇者……お前の父親にも見せたい光景だな」

魔王の碧眼が父親と重なり、エレウスに痴態を見せつけているようで自尊心がズタズタ

に引き裂かれていく。

「う、うるひゃいひゃい！ おっおおおっふ、ふかいいいい♥」

ぬぢゅうううう、ぐぢゅうううううう、ぶぢゅううううう！！！

玩具扱いに屈辱と怒りが沸きあがるのに、尻穴を掻き混ぜられるだけで融解していく。触手のピストン運動がいつそう激しさをまし、疣触手がS状結腸を通り過ぎてさらに奥深くまで回転しながら詰め込まれていく。

ツプ、ツプチュウウウウウウ！

「~~~~ツおっおっおっ?!!」

さらに尿意が逆流していくような違和感と異物感。視線を股間に向ければ、勃起していた陰茎のナカに細い触手が入り込んでいた。小さな蕾と疣が繊細な尿道壁を抉るよう進んでいき、陰囊到達すると触手は根をはり、さらに管へ極細の根を侵入させ精液を啜りだす。

ズル、ズヂュズリユヂュウウウウウウウ!!!

「ッお、ッおおぢい、おッ? おッ?! ツほっおっおおッオッオッオ!!!」

深紅の双眸が見開かれ、涙が轟々と流れていく。珠の汗が浮き上がり、腰が勝手に踊りだす。

は「ひっぎいいい♥♥♥」と叫びながらひたすら、中出しされる快感と種付けされる恐怖の間で揺れていた。十分、十五分……三十分たつてようやく終わり触手は尻穴から抜けたが、ルベルの腹が妊娠十ヶ月目並に膨れた。

「あ……あっぐう……んぐひいいい……♥」

ぶっぴ、ぶっぴゆ、ぶっぢゅうううう。

緩みっぱなしのアナルから白濁液が断続的に噴射される。原始的な排泄快感に声が抑えられない。野太い触手を啞えつづけていた肛門はぼっかりとひらきぱっなしで、薔薇の淫紋が大輪を咲かせている。

「く、くるひ……ひ、ひい……ひい……でりゆ、ナンかでてくりゆう……!」

異物に排泄器官全体が呻き痙攣している。一秒も余慢できない腹痛に脂汗を流す。

ギルルルル! ギュッグリユルウルル!

異音が腹から響くたびに腰が小さく跳ね、尻穴孔が開いては閉じる。

「ブチ撒けるか、余の前でみっともなく糞をヒリだしながらイキ狂うか」

「っああ……!」

氷の目がじつくりと尻穴を凝視していた。喉を震わせながら啞っている。

気づくと魔王だけでなくエントランス中に大勢の魔物が息を潜めていた。勇者ルベルが種を吐きながら排泄快楽に狂う姿を今か今かと待っている。

「あ、ああっ……くううう、んぐううううう！」

「なんだ、ださぬのか。余慢は体に悪いぞ？」

「んぎいい、やべ、やべっりよっごおおお、お！」

ニーグムの手が下腹部を容赦なく押した。軽く押された程度だが、今のルベルには殴打に等しい衝撃。

「くくくくくくううう！」

耐えた。必死に薔薇の尻を窄めて歯を食いしぼる。窄んだ薔薇尻は、小さな蕾のようになり、蕾の中心からぷちゅぷちゅと直腸愛液を少しだけ漏らしていた。必死に排泄を余慢しながら愛液を漏らす、尻穴は滑稽で周囲からどっと笑い声が沸きあがる。

ルベルは尻穴を絞めるのに必死で周囲を気にしている余裕はない。肛門にしか余裕がないから、すっかり花芯を犯す触手を忘れていた。

ズリュ、ズリュジュルズヂュルウルルルルルル！

「くくくくくくッアアアアアア！」

尿道へ占領していた触手が再び精子を啜りだした。すっかり忘れていた花芯の異物。棍棒の打撃をもろに頭へ受けたような、激痛に近い衝撃がルベルを襲い、体中の筋肉が緩んでしまう。

尻穴があつという間に大口を開き、勢いよく異物の塊を嘔き出した。

ぶびい！ ぶりぶりブッポオブッブリュ……！！

「~~~~っくほおっひいひいひい♥♥♥」

白濁混じりの排泄物が、火花を散らす勢いと摩擦力でヒリでていく勢いに腰が跳ねて花芯がブラン！ ブラン！ と激しく揺れ動く。

「薔薇の蜜でもごまかしできんぐらいの臭いが漂ってくるぞ」

「う、るひゃいひいっぎいひいひい♥ み、みりゆなア、みりゆなアああああ！」

ブビブッベ！ ぶっぼっぼぶりいぶっりいひい……！！

固形の排泄物を出し切っても、三十分間の種付けザーメンが中々出し切れない。体内に残っていたガスと混じりながら、延々と尻穴から噴射しつづける。

「クソしてイキやがってる！」「クソアクメ勇者！」「こんな大勢の前でクソブチ撒けてト口顔してるなんて、とんだド変態だぜ！」

「~~~~っ♡」

(りゃめらろにイイ♡ ウンチひりでりゆのぎぼひイイイ♡)

魔物たちからの罵倒に自尊心が抉られる。しかし抉られる痛みが、キュンキュンと腰の奥に深く響いていた。

「ッあッあ、んひイイイ、いぐ、いっぐううう、いっひゃう♡ クソひりだしていっちやうううう♡♡♡」

「いまの姿を父親がみたらどれほど軽蔑するだろうな？」

排泄絶頂に追い打ちをかける魔王の一言。この場を父親に見られる父、エレウスのあの冷たい双眸がさらに冷え切り、微かに眉を顰める表情を思い浮かべた。それだけでさらに激しい快感が、尻穴から脳髓を焼き尽くす。

「いっぐうう♡♡♡ そうじょうだいでいっぢやううう!!!」

ぽこんっ。ぽっこん。ぽこぽっこんっ。

花芯のなかで小さいなにかが膨らんだ。尿壁を擦る無数の丸くて小さな感触。陰囊がずっしりと重くなり、次に竿の肉壁が凹凸に膨らみだした。

「っおっほはあああ？ ふ、ふくら、ふくらんれりゅうううう?!」

「お前の精液を養分に花が育ったのだろ。このままいけば花芯の中から精巢まで花だらけになるだろうな」

「ひ、ひいひいひい！」

「なんだ、怖いのか。可哀想に、なら抜いてやろう」

弾んだ声で魔王の手が尿道を犯す触手を掴み、乱暴に引っ張り上げた。無数の花卉が尿道を優しくもどかしく擦りあげながら狭い尿道口からポコポコ引き摺りだされ、陰囊へ定着していた根っこが引き離されると電流が股間を強かに打った。

「いっひぎい♥ あっぎゃひいひいち、ち×こ、ち×こおおお！ ち×ここわれりゅっほ
おおおおお♥♥♥」

今度は陰茎に集中するあまり、肛門を疎かにしてしまう。種汁を出し切った肛門から、今度は種粒たちが大腸の奥から転がり落ちてきた。

ぬっぽおぶっぽ っお、ぶっぽぼおっ！ ぶっぽっぽぼっおお！

本物の薔薇とは違い、胡桃ていどの大きさの黒く丸い種が次々飛び出してくる。間をおかず、一個、二個、三個と飛び出し、時折、種が二つ同時に飛び出して肛門孔を大きく拡張させた。

「ふっぎひいいいっ♥ おおっおっおっつっ♥♥♥」

硬い殻がゴリゴリと媚肉を挟りながら、長大な列をなして直腸へ降りてくる。硬質な皮膚の触手に腹を犯されている気がした。列をなした種に息つく暇もなく、前立腺を捏ねり潰される。種が一個飛び出すのと同時に、ゴリ！と肉壁に喰い込む。淫紋を刻まれている前立腺を、種に挟られるのは堪らなく甘美で、触れられていない花芯がジンジンと痛いほど真つ赤に腫れ上がり、尿道からはカウパー液が途切れることなく垂れた。

「おしりい♥ いいいっ、種うむのきもぢいいいっぐううう♥」

「触手に種付けされ、種を孕み産む、最早ここは女の膣と変わらぬな。今からオマエの尻穴はケツマ×コだ、アナルで感じる時は「ケツマ×コでイク」と叫べ」

ぬっぽおっぽっぽおおおっぽっぽ！！

絶頂につぐ絶頂で直腸愛液の分泌がとまらない肉壺。硬い種がふやけそうなほどの粘液が、種を包み込み、潤滑を与えた。硬いまま滑りを良くした種たちは一段と勢いよく、鉄砲のよう飛び出し、肉壁へ痛烈な排便甘美を与えていく。

「いっぐ、いっぎゅうっほおお♥ けつま×こおお♥ ケツマ×コおおとまらないいい、種産むのきもひいいい！ いぐ、いっぐどまりやにいいい、ケツマ×コとまらに

やいよいよい❤️❤️

産卵に酔い痴れる勇者は魔王の言葉を上の空で受け取り、卑猥に叫ぶ。思考はあやふやなのに、低俗な言葉を叫ぶ瞬間に背筋にビリビリと電流が駆け上がったことをしつかり覚えた。

ゴリゴリゴヂュウウ！ぬつぶぶつぶつぶつぶ！

「~~~~~ケツマ×こおおお、おっほおおお❤️❤️」

前立腺を、一秒で十個の種に抉り潰された。アナルと陰茎が同時にアクメし、思考と視界が真っ白に染まりながら身体が大きくバウンドする。

ビュー！ブツビュウウウウウ！ドツピュウウウウウウ！

「~~~~~っおっほおおお❤️ち×こおでいぐ、いっでりゅううう❤️ち×こでケツマ×コしてりゅうっほお❤️」

射精と一緒に薔薇触手の種が尿道をポコポコ抜けていく。狭い管と尿道口を摩擦され、拡張される快感は、アナル産卵とはまた違ったツーンと鋭く痺れるような甘味をルベルに与えた。

「いくう❤️ケツマ×コでいくう❤️ち×こでいくう❤️いっばいっへりゅうう❤️まおうに、まものにいみられなぎやらいつでりゅううう❤️❤️いやあ、いやりやあ、い

りやろにいいいっでりゆるおお♡♡♡ けちゅま×こでけつま×こひてりゆううう

♡♡♡ んほおっほおおひっぐほっへえええ♡♡♡ 「」

ぬっぶっぶっぶっぶっぶっぶっぶっぶっぶっぶっぶっぶっ！ ドッピュッピュピュピュピュ、
ピュッピュゆるウ！

アナルとペニス、両孔から卵を噴き出し淫らに歌う少年。眉を弱々しく八の字にしなが
らも、涎と舌を垂らした笑顔でイキ狂う。全ての卵を産卵し終えてもエクスタシーはとま
らず、ぼっかりと開いたままの肛門孔からは直腸汁を排便しつづけ、ペニスからは潮を噴
いて台座をビチョビチョに濡らした。

「はあ、ああ……はあうう……」

「そろそろ、自分が魔王の情婦になったという自覚はできてきたか？」

魔王の冷たい指に火照る背中をなぞられる。長かった絶頂からおり冷静になってくると、
汚れた台座、エントランスホール一杯の濃密な甘酸っぱい匂いと異臭、汗だくの肉体……
死にたいほどの羞恥と屈辱が胸に渦巻いた。

(服従してしまえば、楽になれるのでは……？ でも、でも……奴隷に墮ちては……)

勇者の矜持ではない、脳から警笛が鳴るのだ。それだけは駄目、だと。本能がルベルの

墮落を阻止して口を嚙ませる。

「ツチ、相変わず気丈な心だ。ならば、そのまま永遠に飾られていろ」

ゾツとするほど真つ青な双眸に見下され、身を竦ませる。いまずぐ宣言しようと口を開けるが、声が出てこない。そのうち興味をなくしたニーグムが背中を向けて立ち去っていく。

(やだ、見捨てないで父さん……!)

幼少の記憶が甦る。冷ややかに自分を見下していた父親が無言で速足に立ち去って行く光景。手を伸ばそうとしたが枷に固定された手は伸ばせなかった。それから一ヵ月間、魔王城のエントランスに飾られ薔薇触手で嬲られ、子種を体内に吐かれ産卵し、魔物に嘲笑される日々がつづいた。強烈な快感は慣れる所かルベルの正常な意識は擦り切れ、しかし快樂神経を研ぎ澄ませ日に日に研ぎ澄まされていく。

「どうしゃん、ゆるじで、ごめんらひゃいごめんらひいおいでがらいでえごめんらひい
あいいんヒイッ♥」

休む間もなく気絶しながらも薔薇触手は嬲ってくる。白目を剥きながら夢現に死んだ父親へ謝りながら、ルベルは捲れ返った薔薇肛門から種を吐き出す。

3 地下室にて仕置き

ルベルは牢獄に居た。両手が天上に吊るされている手錠に繋がれて膝立ちの姿勢になっていた。

目が覚めると自分が生きていることに絶望した。それ以上に怒り狂った魔王ニーグムが眼前にいることに恐怖した。幼少の頃のトラウマが再来し、歯の根をカチカチと鳴らす。目だけでこんなにも怒りを表現できるのが自分の父親以外にもいたことを、ルベルは泣いて覚えた。

「仕置きをせねばいけないらしいな」

魔王の手から発せられる魔法陣。忌まわしい肛門薔薇を咲かせた時と同じ色と陣の模様。ぐぐもった悲鳴を上げる中、指はゆっくりゆっくりと自分の腔内に入り舌をじっくりと触ってくる。

「ふぎいいいいいい?!」

舌が焼け落ちたのではないかと思うほどの熱さと痛みに指が離れた後も、犬のように舌をだしていた。その舌に異形ペニスを擦りつけられ、氷の瞳に見下ろされると自分から男

根を口に入れえてしまう。

「舐めろ」

魔王に髪を鷲掴みされ強制的にフェラされると舌に快感が弾けた。先走汁も苦いのに、甘味すら覚えてしまう。

(オチンチン、あちゅいい、舌とけりゅううう)

「ふぐう、ぬるう、ペろお」

何をされなくても舌を動かさないままできなかつた。

「浅ましいの」

嘲笑され、見下されても、背筋に怪しい震えが走りフェラする口が止まらない。亀頭から溢れるカウパー液を嚙下し、陰茎の捻れた肉線に沿いながら舐め、疣の一つ一つにキスしてしまう。熱烈なまでのペニス奉仕に、魔王がググもった声をあげ吐精した。

どびゆるびゆるどっぴゅっどっぷっ。

口から漏れてしまうほどの量の精液を逃すまいと勇者は必死で飲み込もうとする。

「んぐっ、ごく、じゆるるっ」

ぶつぶつと舌の上で子種が弾けて、舌を通り過ぎる精液を飲みこむたびにささやかな気

持ちよさが生まれる。けして大きな劇薬的な快感ではない、しかしもつともつと、もつと頂戴と嚙下するのが止まらない。大好きなお菓子をあと一つ、あと一つだけと言いながらついつい手が出るのと一緒な感覚だった。

「これで、愚策は犯せまい」

口から漏れた精液を指で掬い上げるのに必死な勇者に魔王の冷めた言葉すら耳に届いてはいない。

・
・
・
・

「んぶう、んぢゅうううう！」

「早く射精サセロ」

「はびいいい、あぶうんぢゅううう！ ひゅぐお射精ひやままぶううう！」

地下室にいまいるのは、ルベルと魔物兵士たちだ。

魔物の滾っているペニスをルベルは口で慰め、牡汁を飲むのを繰り返している。最初の頃からどれだけ時間がたったのかはわからない。魔王が地下室にまた来るまでつづけなく

魔物たちが下品に笑いながら、地下室に置かれている道具を準備しだした。

先端は針でなくガラスでできた巨大な注射器風に作られた浣腸器。中へ薬品と自分たちのザーメンを注いで満たしていく。

「やだ、それは……いやだ……うう……」

青ざめるルベルなどおかまいなし。浣腸器の中身が一杯になると、ルベルの薔薇彫肛門めがけて、先端が挿入させられた。

ずつぶつ、と粘着質な音と同時に直腸愛液が肛門皺の淵から垂れだし、嘲笑がまた地下室に木霊する。

「お……おひい……はあ、くううふあ〜〜!」

これからされる仕置きの恐ろしさを知っているというのに、細い管にすら擦れる薔薇紋が途方もない悦を腸管全体に渦巻かせてしまう。自分の尻のはしたなさが悔しくて仕方ないが、もうどうにもならないという諦観が心の底からチラチラを顔をのぞかせてもいる。

「ヒヒッ、オラッ、オ仕置きキダッ!」

ちゆるちゆりゆるるるるるるるう……ぷちゆうちゆうちゆうちゆう……。

ゆっくりとシリンダーが押され、直腸へ薬品交じりのザーメンがはいつてくる。

「ッおっおひいいい、おひりいいいげづま×こっほおおおお……がゆいいいっぎいいいいいいい！」

どろっと粘り気のあるザーメンが直腸壁に触れた途端、痒みと焦燥が襲ってきた。蚊に刺された痒みを何百倍にもした気が狂いそうなほどの不快感。

「オット」

人目も憚らずアナルに指を突っ込もうとしたルベルだが、あっさりと魔物に止められ腕に枷を嵌められる。枷の先には鉛の鉄球がついており、重みで腕をあげることが不可になった。

「んっぎっつぎゃいい、がゆ、がゆぎいいいいい！　ぐ、ぐるじいいいいい！」

腹全体が痒くい気がするが、浣腸器の中身はまだ半分も減っていない。むず痒さに加えて腹を圧迫される苦しさもどんどん増えていく。

「へへ、ホラゴメンナサイシロ！」

「ヒヒッ、行儀ノ悪イ情婦勇者ダナア！」

パッチン！　パッチン！

むきだしの桃尻へ、左右から棒が振り下ろされ打撃される。魔物の容赦ないスパンキン

「ゴ飯中ニ、オ漏ラシシテゴメンナサイッテ！」

「メスアクメシテ、上手ニゴ飯食ベレナクテゴメンナサイッテシロ！」

「ごめんりやひやイツギイイイ！ ごおは、んちゆうつぎイ♥ おもらしいつ、じでえ！ じよほおお♥ ずうにたべりえ、らぐでごめんりやひやあいいぐうつほおおお♥♥♥ ごおめんりやじゃあつほおつごおお♥ いぐう♥ ごめんりや、ひやいつぐうう!!! メスあぐめえ、じひええ、じようじゆに、ごはん、たべれりやくつひえいつぐつでごめんりや、ひやつぎイいつぐうううう♥♥♥ ぐるじイ、いっだいいいいつぐうつほおおお♥♥♥ ゆるじでえ、もうゆるじでえええつ、やらああ、もう、いだいりよも、ぎぼぢイのりよもやらあああぎいいいいいい♥♥♥」

謝れば謝るほど自分が惨めな立場にいるのを理解してしまい、なぜか激しく興奮してしまふ。もうぐちやぐちやの思考のなか、まだ冷静な自分がいて、変態行為でよがっていることを客観視している。

「ダッダラ皿ノザーメン全部喰エ！」

「残スナヨ、グエグエ！」

再びザーメンを山盛りにされた皿に顔面を押し付けられる。

4 絶望に手折られる

「ん、はあ……もうらめえ……」

壁伝いにふらふらとルベルは廊下を歩いていった。歩くたびにアナルのなかの肉デイドルが、狙い祖をすまして一番感じる箇所を突いてくるのだ。微弱に、しかし無視できない快楽が一步進むごとにやってくる。

「もう、ありゆけりやに……くう……」

汗まみれの指が壁から滑り、そのままバランスを崩して床にへたりこむ。皮下脂肪で大きく丸まった尻を突きだしながら体をくねらせる。ぐっぽりと肉棒デイドルを咥えこんだアナル、薔薇の淫紋が汗でテラテラと艶めかしく光っていた。

(もういやらあ……あうう……)

このまま気絶してしまいたいのが、魔王ニーグムの命令に従わなければ、あの凍える瞳で睨まれるだろう。そう考えるだけで、ルベルの手足がゆったりとだが前へ進む。

ヴ、ブブブ……ヴヴヴ!

ふと、どこからか、唸るような低い音が耳に入った。

(は、はあやくう魔王の部屋あいかりゃいとお……！)

きつと業を煮やしたニーグムが魔法か何かを使っているのだ、そう考えて必死に手足を動かし、絶頂寸前のルベルの前に魔王の部屋へつづく階段がやっと見えてきた。黄金で造られた階段に、漆黒の手すり、威圧感を覚えるほど左右が大きく段差が多い。

「ふう、つくうううっほお！ の、のりゆ、のぼりゆからあ！」

尻壺の中の玩具に懇願するが、無視され勢いは依然変わらずアナルを擗られる。

体全てを使って一段ごとをよじ登り、半分ほどまでなんとか上がった。

「お、角お、んつくうううう♡」

ズリズリ、にゅちゅにゅちゅ。ズリズリ、にゅちゅにゅちゅ。

淫熱がぶりかえした肉体は過敏で、乳首と花芯が同時に階段の角にあたり、擦りあげられると三点同時に快樂の火花が散った。体を休ませようとすれば、肉棒玩具がさらに癡猛な回転ピストンをして今度はアナル絶頂が追い打ちをかけてくる。快樂電流が乳腺と尿道を通って骨の髄まで焦がして溶かしてくる。

(い、いま、アクメしたら……もううごけなくなりゅ……)

微かに残っているプライドが、階段の真ん中で痴態を晒して動けなくなるのは避けたが

っている。魔王からのお仕置きも嫌だと奴隷精神も悲鳴をあげている。

「~~~~っおおおお♥　いく、いっちゃうううう♥　ごりごりじゆるじゆるうううう！
い、イキたくりやいけどおおっほ、かってに、かってにイイイイイ♥」

けれども肉体はもう限界だった。お預けされた燻りが、ぐっぐつと煮だって爆発寸前で、
なにより体はすっかり快樂享受に弱くなった。

(で、でも、お、しおきはいやだ……おしおき……)

「お♥」

兜から覗く蔑みの目、父親に似た冷たい双眸——妄想が絶頂のトリガーを引いた。

「お♥　おっほおおおおおおお♥　とうしゃあ、まおうひやまああああ♥♥♥♥」

どっぴゅ、ぶっしゃ、どっぴゅうううううううう！

黄金の階段に白濁の小川が完成した。牝の芳香なフェロモンを流す淫靡なせせらぎ。

(いったあ♥　いっちゃったああ♥　あの目を妄想してっほおおおおお？！　ゾクゾク
ひひゃうう、目のことを、妄想しゆりゆとゾクゾクひっひゃうほおお♥♥♥♥)

水の目に睨まれることを考えるだけで心地よい震えが背筋を駆け上がっていく。妄想を
抑えようとするほど鮮烈に場面が思い描かれ、激しいマゾヒズムが肉体を貫いていく。

ビクン！ ビクン！ ビクン！

陸に上がった魚のごとく、階段に寝ころんだルベルの体が跳ねあがる。

ドン、つぶぢゅう、ドツヂュ！ ぬぢゅう、ぶつぢゅううう！

一度達して過敏になった肉体を玩具は休ませさせてくれなかった。ズブツと結腸を肉刺したまま腹を破りそうな勢いでストロークしてくる。

「つきゃ?! いくう、いきまひゅう ♡ いきまひゅからあもうやめひええ ♡」

ルベルは慌てて指先を痙攣させながら駆け上がるが、絶頂し、過敏になった肉体で味わう角オナニーもまた鮮烈な刺激で苛めてきた。

「〜お、っおおお ♡ ほっこ ♡ ほっこおおお ♡ いっぐ ♡ いぐいっぐいぐうう
うう ♡ 角にちくびとメスチ×ポずりゅじゅるとまりやないいいいぐいぐいぐいっ
ぐううう ♡ ♡ ♡」

妄想をおかずに自ら腰をふりながら階段の角に陰部を押しつけるのが止められない。

どぶどぶと花芯から溢れるザーメンは嵩を増して、小川から立派な川となり床に白濁の湖をつくりはじめており、階段をのぼり切った後には床一面に海ができていた。

.....

ルベルは階段を汚しながら、なんとかのぼりきった。

連続アクメで疲労した体を壁におしつけ、息を整えていた。

ふと、もたれかかっている壁をみると大きな鏡がはめ込まれていた。綺麗に磨かれた鏡は今の自分をハッキリ写している。

男と言うより少女のように顔を真っ赤に染めて情欲に両目を潤ませ、ふっくらとした唇から涎を滴り、鎧は外され丸みを帯びた腰、一瞬自分が写っているとは思えなかった。

いつだったか、魔王ニーグムに鏡の前で指摘された頃よりさらに牝に近づいている。

(これじゃ、勇者というより娼婦だ)

ずつぶぢゆう、ぐつぢゆう。肉棒玩具が激しくピストンしただした。鏡に夢中で不意を突かれたルベルは鏡に手をついて腰を跳ねさせる。

「あふう！ んひいいい、いく、いっっちゃううううううううううう！！！」

鏡に目をうつせば、同じ顔した存在が淫らに尻を振りながら涙を流して笑っている。

(悦んでいる。俺は、父さんを殺した魔王の玩具にされながら浅ましく悦んでいる)

「あ、ああ……」

鏡に舌を突き出せば、舌に毒々しいほどの桃色薔薇模様が描かれていた。尻には大輪の薔薇が咲き誇っている。

(もうムリだ……俺は、もう堕ちちゃったんだ……)

「あー、あっ♥」

(こんなのが父様とおなじ勇者だなんて)

——なんて烏滸がましい

父の声が頭にリフレインし、身を切られるような痛みと愉税を覚えると自身の陰茎から白濁液が噴き上がった。

「と、うさん、もっと、もっと怒ってえ……こんなダメな俺を叱ってえ……」

この場にはいない、父親に甘えるように身をくねらせ自分からデイドル掴み前後運動させる。

——この、一族の恥さらしめ。

幻聴の失笑に勃起した陰茎が更に硬くなり濃度が濃くなった精液を吐き出す。

「ハア、ハア、父さん、父さあ♥」

デイドルをふらついた手で引き抜く。尻穴が癒着したような肉棒を引き抜き、噛みちぎるような勢いで口に入れる。

「んぐう、もぐうねろお……」

片方の手で尻を弄り、もう片方の手で陰茎を握り締め舐めしゃぶる。

指が菊華から抜ける度にドブピュと精液が排泄され床を汚す。

「んぶう……くちもおしりもきぼちいいい、はあ、あ？」

魔王に飼いなされた無様な勇者の姿を鏡で確認しようとしたら鏡に父が、エレウスが立っていた。いま、自分の背後に死んだはずの父が立っていた。

「?!」

(夢、幻覚?　なんで?!)

嘩然とする勇者をよそに父は息子を、まるで死体に群がる蛆虫をみるような侮蔑の籠った水の瞳が見下ろしている。マントで鼻を隠し、僅かに覗く口は真一文字に結んでいる。その様子に息子はどうしようもないほど体が歓喜で震えた。

「とうさあ、とうさん、とうしゃあん」

「お前のような、卑しい者が私の息子であるはずなからう」

誇り高く、美しい父に罵倒されるのが堪らなく気持ちいい、惚けた顔で鏡越しの父を眺める。

「ローズ家の面汚し、お前は要らない子だ。親子の縁を切る」

「ああああ♥」

悪魔の身も凍るような声音に勇者の体は熱さを増し、ぶびゆりと吐き出す精液の濃さも粘り気も増していく。

（父様が僕を嫌っている……嬉しい……）

自分に無関心だと思っていた父が、一心に強い嫌悪の感情を注いでくる。今、この場でこの世で最も懂れ、尊敬してやまない人物が自分だけを見ている。そのことにルベルは、心から歓喜し幸福で胸がいっぱいだった。

「よくも余が一族の家紋すら穢してくれたな」

「んひい♥」

グローブを嵌めた指が白濁塗れの薔薇肛門に触れてきた。布越しの指が薔薇の花弁をねっとりじっくり撫で回す。魔王の手によって調教されつくした排泄孔に愛しい人が触れてくる、それだけで情婦勇者は十回達してしまった。

「不浄の穴で感じるのか、なんと不潔だ。なんと、五本物指を毒沼のように呑み込むのか、お前はもう人間ですらないぞ。色欲の悪魔め」

「んほおおおおお……そんなにやにぐじゅぐじゅされりゆとまたいっちゃううよお……」

父の指が直腸の中を掻き回し、刺激してくる。もう魔王のペニスに挟られる以上の快感が何度も何度も炸裂してしまう。逃がしたくない一心で父の指を思い切り括約筋で捕まえてしまう。

「お前から余に触れていいなどと言ってないぞ」

パァッシン！

冷ややかに突き放されて、尻たぶをもう片方の手で叩かれる。

「あひっん！」

「お前はこの肉塊でも啜えている」

「は、はいいい」

愛しい父の命令に頷いて、デイドルの男根を喉の奥まで啜えこむ。舌の刻印にビリビリと快楽が走るが、父の指がアヌスから抜かれたことに、ルベルはどうしようもないほどの喪失感に襲われた。

「魔王に飼われる家畜と成り下がった元息子よ、せめて手向けとして慈悲を一度だけやらんこともない。私がほしいの难道ろ？」

うってかわって氷に砂糖水をかけたような、甘い響き。溶けきった思考に愛しい人の優しい言葉か染みわたり侵食していく。

(あ、でも、それは……)

グズグズに溶けて、墮落した思考と心が唯一の理性で叫び声をあげる。

愛されているとかいないとか、関係ない。「それ」だけは踏みにじるな。踏み越えたら最後、絶縁宣言以上に親子の縁が切れるぞと、理性の声。

「……ら、ない。いらない、それは、いらない」

か細い声で、なごり惜しさと最後の矜持が絡まった気持ちでレベルは無いに等しい人の尊厳を死守しようとした、が。

「何を今更、お前は父の手で散々よがり狂っていたらう」

「っ！ い、た」

骨に喰いこむほど肩を掴まれ、鏡に押し付けられた。鏡に僅かにヒビがはいる。

「今更いい子ぶっても遅いぞ」

「んぶううう、んぢゅうううう！」

啞えていたデイドルを喉億まで押し込まれる。激しい忌避感に目に涙をため、目尻が垂れ下がっている息子に対し父親は無表情のまま黒髪を鷲掴み、激しく前後へ揺さぶる。

「ほら、こういう下品な行為が好きなんだろ？」

（おぐう、おぐちィい、らべええ♥ いぐう、くちでいでりゅううう♥ だめ♥ だめらろにィい、喉奥まで父ひゃまのチ×ポズブズブきもひィよお♥♥♥）

赤い舌よりも鮮烈な赤薔薇の淫紋。舌が肉棒を滑る快感から精液を美味と感じる味薔、淫紋の効果はそれ以上に広がり、ルベルの腔内から食道を変態的に作り替えていた

「んひいひいひい！！！」

「やはりお前は淫乱な子だな」。

ぐっぽ、ぐっぶ、つぐぽお、ぐっぶ、ぶつぢゆぐううう。

リズミカルに氷塊が入りするたびに、ぶりゆぢゆぶりゆぢゆと直腸汁が零れだす。尻にはミニチュア氷像が半分以上もぶち込まれていた。

「っごお、っほおお♥ ひゅっぐ、あっぐんっぐううう！」

どっぴゅっ、ぴゅっぶっしゅうううう。どっぴゅっ。

嫌々と首を振りながら否定したいのに、氷塊が直腸を圧迫するたびに吐精してしまう。もうイキっぱなしの状態である。

「いく、いっちゃう、いきりやくないのにいい、ひく、いっひゅううう……」

自分も父親も白濁塗れである。顔にかかった精液を舐め取られ、優しく髪を撫でられた。

「これ以上も以下もない、お前はとつくに禁忌を犯しているのだから」

「んっぐうふっぐうううう！」

プシューウウウ。プシャアアアア。

意味深な発言が引つかかるが、肉棒玩具を押し込まれると思考が停止してしまう。亀頭に咽頭を突かれると、小水を漏らしてしまった。

「小便を垂らすほど気持ちいいのか、ハッ」

床に広がっていく黄金水を鼻で啜われ、敬愛する父に排泄を見られた羞恥と嘲笑された悔しさに被虐性感が昂っていく。

ぶっく。

(へえ、あ？　だってこれ、おもちゃ、うそ、なんで?!)

紅玉の目が見開き、おもわず視線を下にむけた。

肉棒デイドルが膨らんだ。妙に生々しいだけの玩具が、脈打ち強張り、熱くなつていく。

ぶっびゅ、どっびゆるうるるう！　ぶっびゅぶっびゅ！　どっぶりゅうううう！！！！人間離れた量のザーメンの奔流。ルベルの頬が膨らみ、唇から白濁色の泡が幾つも溢れて、弾けていく。

「ふっぐ、オっつぐうううう！　んぢゅううう、づりゅづううううう！」

「溢したら……わかるな？」

「んぢゆるううううう！　ぢゅううううう！　っぐっごおお、んぢゅう！　んぢゅううう！」

低くい声に父の怒りを買って罰せられた記憶がよみがえり、戦きながら一段と精飲の勢が増す。濁流の如く荒れ狂うザーメンを勢いよく啜り、あまりの勢いに鼻からもビュブ！と泡立った白濁液が鼻から垂れてしまい、その精液も慌てて啜る。

(んぐううどげりゅ　♥　くちとげでなくなっひゃうううう　♥)

「んっ……　♥　ッ……　♥」

口淫で達したルベル。尿道からは水飴のよう粘り気の合う汁が、そうかと思うと小便がビュツツ、ビュツツと途切れながら。水像を啜えて捲れ返ったアナルからも大便が透明にな

つたとしか思えないほど、野太い半固形の直腸粘液がぶりぶりゆと大きな音をたてて漏れてしまう。

「口だけでも浅ましく絶頂できるか。ルベルは卑猥な子だね」

「ふっぎッ♥」

寒々とした視線が火照る肉体を貫き、マゾの素質を引き摺りだされていく。

ゴリゴリゴ、ゴボゴボ！

「んぎィいいいい？」

腸内で氷像が形を変えていく。重たい質量が溶けて、ズドンっと重たい感触が直腸一杯に居座っていた。ゴロゴロと不吉な音が下腹部全体から聞こえてくる。

バヂィィン！

「つきゃあああああああああ！」

腹痛に呻いているのもおかまいなしに、臀部にビリビリと熱く痺れる鈍痛。

(と、とうしやぁにお尻ペンペンされへりゆ?!)

バッチィィィィィン！

「つくっほオおおお♥♥♥」

唇が窄み、花芯からは泡立った小便が噴き出した

「汚い娼婦だ」

苦々しい声とともに臀部へ強烈な一撃。

（こっほお、これはあ、こっほれえはあああっ！）

下痢を訴える腹痛と、尻叩きで思い出が一つ掘り起こされた。

父の手による尻叩きはあまりに痛く、失禁してしまう始末だった。さらに一度、なにかのパーティーで、大勢の客がいるまで粗相し父親に叩かれた時は脱糞してしまった。幼い記憶に現在の肉体が引つ張られ、ルベルは自分が脱糞していると勘違いしてしまう。

「ごめんりゃひゃいいいい！ でもとまりゃにいとまりゃないろおおおんほっ、でりゅ、でりゅっほオおおおおお♡♡♡」

ぶりゅ、ぶぢゅぶりゅうう。

薔薇肛門から直腸愛液塗れの氷の玉が一個でできた。玉には細い氷の糸が繋がっており、氷の玉が次々でてくる。

「あひィ♡ おおおっ♡ おぢりィ、おぢりィいい♡ んほっ、ほおおおっ♡」
ぶりゅぢゅう、ぶっりぶりィいい、ぶっびべえええええ！

桃色肛門から美しい氷の玉をひりだす快美な脱糞にルベルはうつとりと惚けてしまう。そんな息子が気に喰わないのか、エレウスの足が思い切り臀部を踏みつけてくる。

「これは罰なのだぞ」

「ツギイギやああああ♥」

痛みと快感は紙一重だった。しかしルベルは、もう何をされても心地よく花芯から潮を噴いていた。

「もっと……もっと、もっとお……とうひやまあもっと、るべるにふれえ……」

「……………ルベル、お前は本当に」

黒髪を掴まれ引つ張られる痛みもどこか心地よい。記憶と違わない無表情の、何の感情もない父親の目が間近になるなどぼんやりしていると、唇に湿った感触。

「……とうさ、んぶう、ちゆうう……」

唇が重なり合っていた。貪るよう吸われ、侵入した舌が唾液を奪い、薔薇の刻印を小突いてくる。

「あふう、ふう、ふつううん♥」

穏やかな快感が口一杯に広がる。乱暴に扱われたのが嘘のように髪を掬われ、撫でられ、

どこまでも甘い。

「ああ、私の薔薇」

(どう、さ……)

そこでルベルの意識は途切れた。

.....

「ふ、んっ？　ここ、は……」

気づけばルベルは浴場でお湯に浸かっていた。魔王自らが風呂場で汚れた自分を洗っている。魔王の大きく角張った手で優しく体を洗われるのは、性的快感とは違った気持ちよさがあった。

(この感覚って……ああ……父さん……)

無関心な父が数回だけ、自分を褒めてくれた。その時、頭を撫でられたことがある。大きな掌から伝わる体温が微睡むほど暖かった。

(なんで、いまさら……)

あとがき

こんにちは、カルビです。

今回はpixivにアップした小説「寵愛3」を修正加筆したもので、魔王攻めに足して父親攻めの尻に淫紋メス男子受け私の性癖汁だく大盛りエロ小説です。お気に入り作品なので気合入れて約4万字加筆しました。

pixivでは魔王も勇者もお父さんも名無しでしたが名前をつけて、勇者もといルベルはねり者さんに描いていただきました。表紙絵も挿絵も大変可愛らしく色気溢れるイラストで見るたびににやにやしてしまいます。

ルベルが激しい凌辱エロを受ける姿に興奮していただければ幸いです。

それではpixivが別の本で。

カルビ

収録 2016年pixiv掲載「寵愛3」……加筆修正

氷の寵愛薔薇の刻印

「発行日」 2019年 5月6日
「DL」 2021年 3月25日
「著者」 カルビ
「絵」 ねり者
「発行」 焼肉文庫
「Pixiv」 12050686
「Twitter」 @NiKuZiRu2022
「Mail」 buekbe2@gmail.com
「印刷所」 コミックモール様

本書は成人向けです。18歳未満の方の目に触れないようお願いいたします。無断転載・複製・複写・インターネット上への掲載は禁止です。